

ひとり親家庭支援プロジェクト実行委員会主催

## 第2回作文コンクール

『わたしの夢、  
ぼくの夢、  
家族の思い出』



## 受賞作品作文集

2018年11月24日

[主催]

ひとり親家庭支援プロジェクト実行委員会

この作文集は、ひとり親家庭支援プロジェクト実行委員会が主催した、第2回「わたしの夢、ぼくの夢、家族の思い出」作文コンクールに入選した、6組計7名の方々作文を掲載したものです。

部門	名前		住所	入賞
子ども部門	高家 大暉	小4	東京都	優秀賞
	亀田 梨桜	小6	大阪府	準優秀賞
	田中 美咲	中3	大阪市	佳作
親部門	山田 花子(仮名)		九州	準優秀賞
	洲崎 裕美子		石川県	佳作
親子部門	田中 陽太(子：仮名) 田中 まゆ(親：仮名)		東京都	優秀賞

# ひとり親家庭支援プロジェクト ～第2回「わたしの夢、ぼくの夢、家族の思い出」 作文コンクールの趣旨

子どもの貧困が社会問題となって10年近くが経ちますが、子どもの貧困率はますます悪化しています。特に母子家庭などの「ひとり親世帯」の子どもたちの貧困率は最悪とされています。最近はこども食堂や塾に行けない子どものための学習支援等々、民間の子ども支援が注目を集めています。

そこで、ひとり親世帯の子どもたちの現状と心情を知り、政策に活かしていくために、こども達の声を知る作文コンクールを2017年に実施しました。今年は第2回目として、募集する作文の内容ならびに対象を拡張し、実施することといたしました。

11月24日（土）には、横浜市のこどもの国にて表彰イベントを行い、受賞者とそのご家族を招待し表彰させていただきました。

11月24日には、横浜市のこどもの国にて表彰イベントを行い、受賞者とそのご家族を招待し表彰いたしました。

主催は「ひとり親家庭支援プロジェクト実行委員会」とし、後援は、厚生労働省、こどもの国、母と子支援議員連盟にご協力いただきました。

是非この作文集を読んでいただきたいと思います。

2018年11吉日

ひとり親家庭支援プロジェクト実行委員会  
委員長 赤松 良子  
(元文部大臣、日本ユニセフ協会会長)

## 表彰式開会挨拶

審査委員長をつとめさせていただいた丹羽雄哉です。本日は昨年に引き続いて、ひとり親家庭対象の作文コンクール表彰式をこのこどもの国で開催することになりました。実行委員長赤松良子に代わりまして、私が開会の挨拶を述べさせていただきます。

私は国会議員在職中、二度、厚生大臣の任につき、介護保険の創設など、社会保障全般にたずさわってまいりましたが、国民一人一人が健やかに安心してくらしたいけるよう、まさに揺りかごから墓場まで幸せな人生だったと思っていただけるよう尽力してまいりました。

ひとり親家庭の子どもたちもその夢を叶えられるよう、お母さんたちの就労支援等にも母と子支援議員連盟を作って力を入れてまいりました。

その延長の企画として昨年、「私の夢、ぼくの夢」という作文コンクールを実施したところ、小学生から高校生まで実に胸を打つすばらしい作品の応募がありました。逆境にあっても他をうらやんだり自分の境遇をうらんだりせず、努力して夢を叶えたい、親に楽をさせたいという姿勢に、審査員一同涙を禁じえませんでした。

子どもたちの作文は厚生労働省、文部科学省にも届け、少しでも夢が実現するような施策を私たちも後押ししたいと考えています。

今年は少し趣向をかえまして、子ども部門だけでなく、親部門、親子部門も作りました。親御さんたちの思いも十分伝わってまいりました。作品の講評はシンポジウムの後で和田勝（わだ まさる）実行委員から話していただく予定です。

コンクール開催にあたって多くの皆さまからご協力ご支援をいただいたことで、こうして表彰式のできる運びとなりました。改めて感謝申し上げ、開会の挨拶といたします。

2018年11月24日

丹羽雄哉

## 子ども部門 優秀賞

「わたしの夢、ぼくの夢」

高家 大暉  
緑ヶ丘小 4年  
東京都

ぼくの夢は、子供のデイサービスの先生に成ることです。

理由は、一人で、ご飯を食べられない子にご飯を食べさせてあげたり、一人で動けない子を助けたり、この様に体の不自由な子を助けたり、応えんしたいと、思います。

そんな体の不自由な子と、遊んでいると、楽しいなど、感じます。

デイサービスの先生に成りたい時には、体の不自由の人が出来ないことを勉強しないとイケないと、思います。今、学校の国語の授業で「手と心で読む」と、いう勉強をしています。内容は、目の不自由の人についての話と、点字の仕組みなどが書いてあります。その教科書には、特別支えん学校の子供達の中には、点字で書かれた教科書で学習をしている人もいます。などと、書いてありました。

目の不自由な人は、最初、点字を手で読み取ることが大変そうだなと、思いました。

デイサービスの先生に成るには、体の不自由な子供達のどこが大変か、知ることがまず、必要じゃないかと、考えました。

これから、沢山勉強して、体の不自由な子達がどうやったら、喜ぶかを考えながら、勉強していきたいと、思います。

これからの社会に対しては、もっと、点字ブロックや点字がふえたり、エレベーターがふえたり、もっと体の不自由な子達を助けてあげる様な物がふえたり、皆がもっと、やさしくなって体の不自由な子達を助けてあげれる様な社会になったら、良いと、思います。

## 子ども部門 準優秀賞

### 「わたしの将来の夢」

亀田 梨桜

小学6年

大阪府

わたしの将来の夢は、看護師になることです。なぜなら、一番上のお兄ちゃんが小さいころから心臓が弱くて、二回も手術していて、大変だったということをお母さんから聞きました。赤ちゃんのときに、心臓にふたんがかからないように水分制限や、夜中に何度もおきてなかなか、ねむれなくて車で、ドライブしながら、ねかしつけた話も聞きました。最近では、そのお兄ちゃんがもうちょうの部分が、いたくなって病院に入院して、手術をしました。そのときにお兄ちゃんも手術をしてつらくてこわい思いをしたと思います。わたしが看護師さんになればそんな病気のかんじゃさんの心がさみしくないように、声をかけたり、お世話をしあげたいと思いました。それと、わたしのおばあちゃんは、認知症という病気です。時間の感かくがわからなくて、朝の三時におきてせんたくをしたり、うろうろしているそうです。お母さんが近所にめいわくだから、朝の六時になってからせんたくをしてねと、言っているのに毎日朝早くおきてせんたくをしています。お母さんは、そんなおばあちゃんや、お兄ちゃんやわたしたちの、お世話をしてくれます。わたしのお母さんは、いつも優しくとてもがんばりやさんで、前むきで、おもしろくて、わたしが落ちこんでいるときにはげましてくれたり、いつもどんなときでもわたしのみかたになってくれるわたしの大好きなお母さんです。そんなお母さんにも同じように、お母さんがなやんでいるときはわたしが相談にのってあげたり、お母さんを笑顔にしたいと思いました。それと、家族みんなや家族でない人もわたしが笑顔にしたいと思いました。わたしには、むずかしいからよく分からないけれど、生活や学校へ行ったり資格をとるということは、たくさん勉強もしてお金もたくさんかかるみたいです。わたしは、高校生になったらすぐ、アルバイトをして、お金もためようと思います。お給料がでたら、家族の生活のために、お金をあげて貯金もして、将来のために使いたいです。わたしの夢がかなうためには、自分の努力と勉強しやすいかんきょうが必要だと思います。たとえば、看護学校がたくさんあれば、たくさんの方が看護学校で勉強ができるし、看護師さんがたくさんふえてたくさんの人を助けたりすることができると思います。幸せになる人がふえると思います。わたしは、病気のかんじゃさんにありがとう、言ってもらえるような看護師さんになりたいと思います。人の役に立つ

ことがどれだけ大変なのかは分からないけど、少しでも多くのいろいろな人の命だけじゃなく、心も守れるような看護師さんになれるようにこれからの生活でも困っているような人を見かけたら声をかけようと思います。絶対になります。

## 子ども部門 佳作

### 「私の夢」

田中 美咲  
中学3年  
大阪市

私は昨年、「私の思い」というタイトルで応募して入賞しました。今回は昨年との自分の変化と新たな思いを聞いてください。

私が昨年までと一番ちがうのは、母や知り合いの方に「声優」という夢を伝えられるようになったことです。昨年までは、反対や否定されるのが恐くて言えませんでした。ですが、作品が入賞したことによって自信がつき、胸を張って夢を語れるようになりました。自分の中でも大きな進歩だと思います。

私が心配するよりも周りは応援してくれました。行きたい高校も見つかり、そこへ向け塾に通い始めました。フリースクールへも通っています。学校にも少しだけ、別室だけに行くようになりました。成績も少しずつ上がってきてすべてが順調に進んでいると思っていました。ですが、

「別に高校から学ぶんじゃないなくても卒業してからでも良いんじゃない？」

これは三者面談での先生からの言葉です。最初聞いたときはガツンと頭を鈍器で殴られた感覚に陥りました。でも今は、先生の言う事は理解できます。私の将来を思ってくれているのはよく分かります。それでも、頭ごなしの否定はとてもショックなものでした。

ですが、家に帰ってから一番腹を立てたのはなにも言えなかった自分にでした。先生だって人間です。エスパーじゃありません。思っているだけじゃ伝わらないのに、言葉で伝えられなかったのは自分で、先生に腹を立てるのは違うと思ったからです。

なので今は塾以外でも十時間ほど勉強したり、息抜きで早口言葉を練習したりしつつ、どう伝えたら先生に私の意志が伝わるかを考えています。上手に伝えるためにこんなに頭を使うとは思っていませんでした。頭を悩ませるたびに、「こんなに本気になれるものがあるんだな」とうれしく思えます。深く物事を考えるのが苦手な自分がこんなに悩むのは初めてで自分でもびっくりしています。

だからこそ、私は先生から否定された理由をととても知りたいです。それを受けとめつつ、自分の思いをしっかりと伝えられるようになりたいと思っています。それで伝わらなくても、私は第一志望に行くつもりです。

ですが、私の行きたい高校は公立ではありません。なので学費がとてめがかか



ります。もちろん補助金はありますがそれでも母への負担はだいぶかかります。ですが、一人親だからという理由で進路を変えるほど生半可な気持ちで声優は目指していません。本気です。母には申し訳ないと思っています。なので、少しでも補助金額を増やしてほしいです。学費を理由に夢を諦める人は少なくありません。そんなの悲しいし、もったいないと思います。前にご年配の方から「若いときにやりたいことはやっとき、後悔するぞ」と言われたことがあり、その通りだと思いました。だって今でさえ「小さい時から英語やそろばんを習えばよかった」と思うことがあるからです。私はもうこれ以上後悔を繰り返したくないし、他の人にも後悔してほしいです。それに、やらないよりもやって後悔するほうがましです。それは一つの経験になっていつか役に立つかも知れません。だからこそ学費という障害だけで夢を諦めたくないです。若者の夢を叶えるためにも補助金を増やしてほしいです。

最後に、将来を決めるのは自分です。ですが、思っているだけでは叶いません。夢を実現させる第一歩は自分の思いを伝えることです。どんなに否定されても、伝え続けることが大事だと思います。そして行動することも大事です。口先だけじゃなく、「こんなにがんばっているんだ」と周りに思ってもらえると理解されやすくなると思います。

まずは私達が行動することで、補助金が増えたり、応援してもらえる。そんな社会を私は望みます。

## 親部門 準優秀賞

### 「子どもへ託す夢」

山田 花子(仮名)

九州

高校三年生になった娘には夢があります。生まれ育った九州で医師になる事です。

小さな時から体が弱く、しょっちゅう喘息の発作が出ていたため、その治療をしてくれる優しい病院の先生に憧れたのが、最初のきっかけかもしれません。

私は娘が一歳の誕生日が来る前に離婚をしました。

当時は様々な事があり、身も心も疲れきってうつ病の治療にも通っていましたが、親子二人暮らしのため、仕事を探さなければなりません。

とり急ぎ保育園に娘を預ける手続きを済ませ毎日、ハローワークで求職活動をするのですが、特に専門的な資格があるわけでもなく、専業主婦だった私を雇って下さる所はなかなかありません。

面接に行っても「小さな子どもさんはよく病気をされますが、その時は誰が面倒を見てくれますか。」「残業や休日出勤がある場合はどうされますか。」

と聞かれるのは当たり前。

時には「こんな小さなお子さんがいるのに離婚するなんて……。あなたは無責任な人なんですね。」と心ない言葉を言われた事もありました。

とにかく自分がやりたい仕事、出来る仕事を探すのではなく、小さな子どもを抱えていても雇って下さる所を探す毎日でしたが、不採用通知が一件、また一件と届く度、人間失格の烙印を押されているような気持ちになっていきます。

今考えれば大袈裟はようにも感じますが、当時、十件以上の不採用通知は「あなたは社会に必要とされていません。」と言われている気がしたのです。

なんとか朝四時からパンを焼くアルバイトと回転ずしチェーンで魚を捌くアルバイトを見つけ、掛け持ちで働きながら正社員の仕事を探しました。その甲斐あって、今は私と同じ立場のひとり親家庭等を支援する「九州母子寡婦福祉連合会」に就職する事ができました。

会長をはじめとする皆さんが陰になり日向になり力になって下さり、おかげさまで勤続八年目となりました。

私は娘に常に二つの事を言って聞かせます。

一つ目は「感謝ができる人になってね」という事。母子会の会長さん達やその他、私や娘を気にかけてくれる家族・親戚・友達など、「やってもらって当たり前」の事など何一つない。おかげさまで……。ありがとう。」という気持ちを絶対に忘れてはいけないよと話しています。

二つ目は「自分で食べていける力をつけなさい」という事。我が家は食べていだけで精一杯。残してあげられる財産は何一つありません。その事を理解している娘は「私が医者になってママを幸せにしてあげる。ママが頑張ってきた分、今度は私が頑張るから」と優しい事を言ってくれます。

たいして手に職もない私が苦勞して働いていた姿を見ていたのでしょうか。毎日、必死で勉強に取り組んでいる姿を見るとうれしい反面、せつなくもなります。

しかし、娘の頑張りだけではどうしようもない貧困の壁にぶち当たっている事も事実です。

近年、全国各地でひとり親家庭の学習支援は目覚ましい広がりを見せておりますが、医学部や難関大学を目指す子が利用できる所はほとんどとって、ありません。自助努力で何とか出来る子は一握りだと思います。

大学に入学した後は給付型奨学金や学費の免除などの制度が少しずつ増えているので、次は大学に進学するために努力している子ども達の学習支援があれば、さらに夢が広がるのではないのでしょうか。

これから大学受験までの数か月。まだまだ合格には程遠いですが、親子二人三脚で頑張っていきたいと思っております。

注) 作者 匿名希望

地域名を伏せて欲しい旨希望 地域名を九州とした

## 親部門 佳作

### 「子どもへ託す夢」

洲崎 裕美子  
石川県

託すということは子供に自分が叶えられなかった夢を任せる、頼むという事になる。自分がまるで夢を叶えられないようだ。子供の将来を思うと心身共に健康で豊かな人になって欲しい。それはどの親も同じ事を思うのではないだろうか。

自分が大人になった時、まさか離婚し、一人で子供達を育てていく事になるろうとは夢にも思わなかった。今でも負い目を感じながら生きている。子供にはこんな大人になるなよと声を大にして言いたい。自分を否定しているようだがそれは社会からも否定されていると感じる事があるからだ。夢破れて（離婚して）故郷へ帰りそこで待っていたのはまず就職難だった。離婚する人は人格に問題がある、結婚して家庭も上手くやっている人でないとこの仕事は勤まらない、どうせなら家庭円満の方に来て欲しい、そう言われると確かにそうだ。自分も家庭が上手くいっていたときは、一人で子供を育てて大変だねと同情の眼差しと、この人に何か問題があったのではないかと考えていた。ところがいざ自分がその立場になると、好きで離婚した訳じゃないという想いが込み上げてくる。自分がその立場にならないと分からないことばかりだ。ある時は講演会で子供とどうやって向き合うか、夫婦が上手くいっていないと子供も自分の居場所を見つけられず、離婚しようものなら最悪の事態に陥る。もちろん私の事を言っている筈もなく、悪気も無いと思うがその後から講演会の内容は全く入ってこなくなってしまった。

今の状況を悲しんでいても負の連鎖が起こる気がしていつでもマイナスをプラスへ変えようと努力して生きている。それでもお金の事が絡んでくると楽観的でもいられない。自分は子供達を大学まで行かせてあげられるのだろうかとここ何年何度となく考えてきた。一度も昇給した事のない会社はどんなにやりがいがあっても私には意味を為さない。母子手当が貰えなくなるだろうから給与を上げないとまで言われた。会社としては何があっても辞めない人間だと思われていたのだ。確かに所得に応じて母子手当の額が決まり、会社が出さなくても国が出してくれるなら経費が抑えられる。お金が絡む問題、その永遠とも思えるテーマを考える中で、寡婦会の存在を知り、調剤事務の資格を取得した。安価で交通費まで頂き、ますますやる気が起きた。次は医療事務を取得して転職できれば少しは生活が楽になるかもしれない

い。二入を大学に行かせてあげる事が出来るかもしれない。そう思っていた時に転機が訪れた。高専卒業後から東京へ嫁ぐまで勤めていた会社から戻ってこないかとの誘いを受けたのだ。何もかも好条件だった。こんな機会はもう二度とないと思い、やりがいがあり楽しかった会社を後にした。人脈が広がり、これから生きていくのに必要なスキルをたくさん手にしたし、今の仕事に生かされている点多々あると感じる。経験という財産、またお金の代えられない知識を前職で得たと考えている。

今の自分は胸を張って幸せだと言える。協力してくれる両親や妹家族、何より双子達。あの子達が居なかったら今頃どうしているだろう……。引き籠もって無職だったかもしれない。我が子には小さくても良い、夢を持って生きて欲しい。日常の小さな幸せを感じて欲しい。自分の経験から社会全体が、片親に対する偏見を持っていると感じるので、そう感じて欲しくないのて円満な家庭を築き、社会の一員として仕事をして、社会との関わりを持って欲しい。共働きでも、片親でも子供に関わる人は多ければ多いほうが良いと思う。核家族が減り、大家族の中で助け合える環境を整えばより良い社会になると思う。自分の力では限界がある、社会で次の世代を育てていけるよう、知らぬ顔をせずに昔のように近所でも助け合える環境が整う事を子供に託す事、希望としたい。

## 親子部門 優秀賞

(子)

### 家族の思い出～父との思い出

田中 陽太(子：仮名)

大学受験

東京都

物心ついた時にはもう父と離れ母と暮らしていた。母との思い出は多すぎて語りきれそうにない。父との思い出を振り返る事にした。

母へのDVで、私は6歳の秋に母と2人母子生活支援施設に入り父とは別居し、小3の頃離婚が成立した。父の暴力で何度目かの怪我をした母と、自転車で逃げた後を父が追いかけてきた所に来たパトカーに乗り逃げて以来、私たちは安全の為、名前と身を隠して暮らし、小学生の間父と会う事はなかった。

父との次の再会は、中学2年の、多分夏だった。

DVのフラッシュバックでPTSDになり苦しんでいた母が、自分の病気と気持ちとを切り離して、私のアイデンティティ模索の為に、勝手に進めた再会で、正直最初の再会について余り記憶にない。

父との再会は、数回で途絶えた。住所を伝える事はなかった。

面会が途絶えて一年以上経った高2の秋、突然、父の訃報が入った。脳出血による急逝だった。父の訃報を耳にした時、父とは長い事離れて暮らしていて、実感がなかった。待合せを決める時も会う時も、私は父に「ですます体」の敬語で話していた。

しかし、通夜でも、告別式でも、遺影を抱き、独り父の棺と共に乗った霊柩車の中でも、私は泣き続けた。生まれて初めて葬式に参列したのが、父だった。父の仕事仲間が来て弔い、父の話を語ってくれた。彼らは、父のDVが原因で離婚した事は知らない。設計仕事の傍ら、仕事仲間と母子生活支援施設に果物を届けるボランティアもしていたそうだ。(父は私達が母子生活支援施設にいた事を知らない。)人間とは不思議なものだ。「いつも息子の話を、嬉しそうにしていた。」とも話してくれた。

私は、自分の知らない父の一面を知った。

父との最期のお別れの時、父の額に触った。棺に入った父の顔と、冷たい肌は、生涯忘れられそうにない。

父は火葬場で骨となり父の親族や仕事仲間、母と共に拾った。父の骨は、とても軽かった。父であった面影はもうそこにはなかった。

父が生きていた最期の証しとしての形見分けとお別れをする為、私は、別居後の父の設計事務所兼自宅のマンションを訪ねた。

ポストを見て、母が「あっ」と小さな声をあげた。父は母と離婚後、元々の自営の会社の他に、一つ会社を作っていたらしい。その会社名は、「ソレイユ」だった。母によると、フランス語で「たいよう」という意味らしい。私が安全の為別の通称に戸籍を変更する前の生来の名前であった。

中に入ると、仕事道具と、生活用品が溢れた部屋の、父の仕事机の横の壁に、昔母が父に送った、父と面会していなかった小学生の幼い私が座敷に座って笑っている写真と、私の誕生の知らせを「たいようより」と書き父母が親類・友人知人に送った時の写真、2枚が、拡大して貼ってあった。

父の訃報を聞いた時は実感がなかったが、私はお葬式で泣き続けた。「ソレイユ」と言う会社名の意味を知った時も、父の自宅兼仕事場の壁に自分の写真を見つけた時も、目頭が熱くなるのを感じた。子供の頃の記憶も殆どなく、物心ついてから会った回数も少ないのに、なぜ涙を流したのかと思った。しかしやはり数少ない「ですます体」の面会の中で、自分に持ち得る事の決してない父からの愛情を感じていたのだろう。死後、火葬場で父の仕事仲間から父が私の話をよくしていたと聞いた時も、自分の写真が貼ってあるのを見た時も。

私は今、医師の仕事、そして医療通訳翻訳士を目指している。

それが私の夢であり志であるならば、生きていたら父も応援してくれただろう。父のDVから家を出、苦勞もした。一緒に過ごした時間も限られていた。それでもやはり、私を思ってくれていた私にとっての唯一の人間らしい父である。

思い出を胸に成長してきて、今まで支えて下さった方に、恩を返す為にも、私は、自分の志を叶えたいと思う。残り半年、働きながら、この限られた浪人生活を大切に、目標に向かい、勉強に励む所存です。

(親)

## 家族の思い出の物語～息子へ～

田中 まゆ (母：仮名)

東京都

半年前の高校3年の春、卒業記念に息子と2人で、桜を見に行く旅をした。舞散るピンク色の桜の花を君と眺めながら、私は君と暮らして来た幾度もの季節を思い出していた。

18年前の出産。陣痛の合間に、お腹にいる君に手を添えたパパとママの3人で、溢れんばかりの笑顔の写真を一枚撮った。写真は今はどこかに仕舞われている。

パパは陣痛で痛がるママの腰を撫で続け、君はママのお腹の産道を通り抜け、陣痛開始から14時間後に生まれた。パパは君を最初に抱き、軽く小さな君の重みと産声と確かな温もりに涙を流した。これが親子3人での1つ目の共同作業だった。

パパは君の名前を熱心に考えた。君の名前は「たいよう」と決まった。「大きな太陽のように周りを照らし温めながら、幸せに育てて欲しい。」そう願って私たちは親としての第2の大きな共同作業、「名付け」を終えた。

第一子で全てが初めて。おたおたする度、新米夫婦は父と母に成長させて貰った。私が思い出す特に幸せなひとときは、仕事後の保育園のお迎えで、走って駆け寄って来るはち切れんばかりの君の満面の笑顔と、お喋り。寝る前の絵本読みのひととき。パパの君との一番の思い出は、お風呂と、休日の公園での肩車かな。本人にはもう聞けないので分らない。君は幼すぎて覚えていない3人家族の時の思い出。

しかしその反面、パパのママへの暴力は更に頻回になり、小1の夏母子でシェルターに保護され、母子生活支援施設で別居、小3で離婚した。行政の助言で安全の為、母子共に名前を2度通称に変え、最終的に家庭裁判所で通称を戸籍名に変更し、君は生来の「たいよう」という名を手放す事となった。

2人暮らしの母子生活支援施設の時の思い出。お金がない中工夫し、当選したスーパーの懸賞の、田植えや稲刈り旅行、お芋掘りや親子料理教室などに一緒に参加した事。君は忘れてしまったかもしれない、お母さんにとっては親子2人の楽しい思い出だ。



君が生まれて16年目の高2の秋、パパは他界した。

君は幼い頃の父との思い出は記憶にないと言う。安全面から名前を変え、面会をしなかった小学生時代を経て、最初は嫌がったが、君は父との面会を、たまにした中高時代。その後又会わなくなり1年以上経った時、君は、父の急逝を知った。葬儀中、親族席に座る君が真っ赤な目をして鼻を吸る音だけが、斎場に響いていた。私は息子父にそっと手を合わせながら、末席で、君の誕生に涙を流した父の死を悲しむ君を静かに見守っていた。

そして今春、私は一人、君の高校卒業を見送った。

今、君は浪人して働きながら、自分の志に向かって懸命に邁進している。来年の春には新しい道を歩み始めるだろう。進学先によっては寮生活となり、母のいる家を巣立つかもしれない。何気ない会話や親子喧嘩も、思い出に変わるだろう。

家族には、家族の分だけ各々に形や思い出があり、時と共に形を変える。誕生、DV、病気、別居や転居転校、離婚、死別、入学や卒業、様々な事があった。お互い恐らく、苦しい事も楽しい事もあった。それらは、私達をまた新しい未来へと送り出してくれるだろう。息子が巣立つ日、私は空の巣症候群になるかもしれない。一人で1つの大切な命を18歳まで育て、見守るのは、幸せでも大変でもあった。言葉にならない。元気に18まで育ててくれた。君と過ごした母としての思い出は、1人の人間として、私には大きなギフトだ。沢山のプレゼントを有難う。

君の人生は、これからだろう。ふと立止まった時、愛されたり支えられたりしながらも、自分なりに頑張ってきた事を思い出し、誇りと励みにしてほしい。

私も子の旅立ちの喜びと寂しさを胸に、家族の掛替えのない思い出をくれた18の君に感謝して、君が巣立った後も更年期と諦めずに、まだ続く自分の人生を形作って行こう。何十年先振返れば、又そこに新しい自分なりの思い出が出来ているのを期待して。

## 講 評

審査委員の和田勝です。昨年にひきつづいての作文コンクールですが、今回、子ども部門だけでなく、親部門、親子部門を設けました。ひとつは昨年の子どもの作文が甲乙つけがたいほどみな心をうつものであり、こういうお子さんを育てておられるひとり親家庭の親御さんのお気持ちを知りたいということもございました。

また幼いお子さんの場合など、夢を語るという作文という枠組みでは、手段として難しいものではないかという声もあり、絵やはり絵など、作文以外のものでも親子で応募してもらっていいのではと、広い形で親子部門を設けました。

しかし、主宰者側の意図を十分伝えられなかったせいか、親子部門への応募は3作でした。しかし優秀賞の田中さん親子の作文は審査委員長と委員5名全員が最高得点の5をつけるという良質なものでありました。

親部門は、離婚によって子どもさんと共にくらすことができなくなった父親の立場からの応募がかなりありました。近年、母子家庭だけでなく、父子家庭にも福祉の手がのびるなど、さまざまな対策がとられていますが。離婚によって子どもから引き離されてしまう立場の親の気持ちが作品ににじみでていて、今回受賞にはなりませんでしたが、子どもの福祉や権利を考える上で、大変考えさせられる問題を提起してもらえました。

子ども部門は昨年に引き続き、状況に左右されることなく、自分の夢を語っていて、子どもというのはどんな環境にあってものびのびと成長しているのだと気持ちが明るくなりました。母子家庭の母が不安定な収入等にもめげず、子どもをしっかりと育てているということでもあります。

私たちは、昨年、今年の商品から見えてきたものを、文部科学省、厚生労働省の施策へとつなげる努力をしまいにします。

最後に、応募して下さったみなさまに感謝申し上げます、講評といたします。

2018年11月24日

和田 勝





## 開催概要

### ■作文コンクール概要

---

テーマ : 「わたしの夢、ぼくの夢、家族の思い出」  
対象 : ひとり親家庭の家族  
作文応募 : 子ども部門、親部門、親子部門  
それぞれ、優秀賞1名、準優秀賞1名、佳作3名の計15名  
賞金 : 優秀賞10万円、準優秀賞5万円、佳作1万円  
募集期間 : 2018年7月15日～9月30日  
審査期間 : 2018年10月 審査委員会にて選定

### ■表彰イベント概要

期日 : 2018年11月24日(土)  
場所 : 子どもの国 (横浜市青葉区)  
内容 : シンポジウム、受賞者への表彰状・賞金の授与  
主催者および審査員からのコメント

### ■主催

ひとり親家庭支援プロジェクト実行委員会

### ■後援

厚生労働省、社会福祉法人こどもの国協会、母と子支援議員連盟

### ■協賛

久光製薬株式会社、日本医師会

## ひとり親家庭支援プロジェクト実行委員会

### ■ひとり親家庭支援プロジェクト実行委員会

---

委員長	赤松良子	元文部大臣、日本ユニセフ協会会長
	丹羽 雄哉	元衆議院議員 元厚生大臣、母と子支援議員連盟会長
	坂口 力	元衆議院議員 元厚生労働大臣、母と子支援議員連盟副会長
	徳川 家広	徳川記念財団理事 作家
	横倉 義武	日本医師会長 世界医師会会長
	一色 浩三	富国生命保険相互会社 取締役
	佐々木 典夫	社会福祉法人こどもの国理事長
	和田 勝	国際医療福祉大学客員教授、NPO あごら理事長
	円 より子	元参議院議員、母と子支援議員連盟顧問

### ■審査員

委員長	丹羽 雄哉	元衆議院議員 元厚生大臣、母と子支援議員連盟会長
	小河 光治	公益財団法人あすのば 代表理事
	松井 久子	映画監督、映画プロデューサー
	円 より子	元参議院議員、母と子支援議員連盟顧問
	和田 勝	国際医療福祉大学客員教授、NPO あごら理事長

### ■事務局

ひとり親家庭支援プロジェクト実行委員会事務局  
〒102-0084 東京都千代田区二番町1-2 番町ハイム 814 NPO 法人あごら内  
Tel 03-6256-9023 FAX 03-3261-1836  
Email info@hitorioyakatei-shien.com